エメラルドグリーンの瞳のアイツ

柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エメラルドグリーンの瞳のアイツ

【Ｎコード】
Ｎ４１８９Ｉ

【作者名】
柚木

【あらすじ】
エメラルドグリーンの瞳をしたあなたに会った日から、私は『夢』を、追いかけようと思った。

（前書き）

私は、あなたが好きだったのかも知れない――

私が最初にアイツに出会ったのは、まだ寒い冬だった。
外に出ると寒くて、コートを着ていてもその寒さは身にしみた。

学校帰り、私は初めてあなたに出会った。
あなたはあったかそうな毛皮をまとって、のうのうと歩いていたね。
私が軽く会釈をすると、あなたは、ぷいっ・・・とそっぽを向いて
歩いていってしまった。

感じが悪い。でも、それ以上にあなたのエメラルドグリーンの瞳に
私は惹かれた。

それでも、何回か顔を会わせるうちに、少ないけれど、挨拶程度の
会話を交わすようになったよね。
私はそれがたまらなく嬉しかったよ。

「今日はどこに行くの？」

そう聞いた私にあなたは

「どこでもいいだろ？」

ってそっけなくこたえてどこかに行ってしまった。でも、そのそっ
けなくこたえる顔のはしに、ちょっぴり照れた顔を見つけて、愛お
しく思えた。

いつしか、一緒にいる時間が長くなって、何か話すわけでもなく、
一緒に塀に腰かけて、ぼーっとしていることも多くなったっけ。

会話は相変わらず少なかったけど、少しずつ、少しずつあなたのことを知るようになった。

あなたは私よりずっと大人で、今は一人暮らしをしていて、この辺りに友達が住んでいること。

いつしかあなたは慕えるお兄さんになっていた。

ある日・・・・・。

あなたに会いに行くと、あなたの周りには友達がいた。

友達は双子の女性と一人の男性だった。

双子の女の人は、私をだいぶ可愛がってくれた。

悩み事をたくさん聞いてくれた。

「ねぇ。そろそろ将来のコトとか考えてるんでしょ？」

悪戯っぽさの光る瞳が私をじっと見つめた。

「まだまだです。でも・・・出来るかどうか、なれるかどうかわからないですけど、なりたい夢は持っています。」

「ふーん。何？」

目は私から離れない。

「いつか、私が自信を持って言えるようになったら聞いてください。」

自信がなかったから私は逃げた。あきらめなければいけない夢かもしれないから。

「そんなたいそうな夢なんだ。」

あなたは私が持ってきたセンベイをかじりながら聞いてきたね。

「・・・・」

私が応えなかったのは、自信がなくって、あなたの声が届かなかったからだよ。

しーちゃんが車にひかれた。

ひき逃げだった。犯人は見つかっていない。

しーちゃんは、双子のお姉さんだ。

皆落ち込んでいた。

もちろん私も。

私はブロック塀に腰掛けていたあなたの隣に座って言ったよね。

ちゃんと・・・届いたかな？

「私ね。あんた達を助けるため、医者になるよ。年取ったり、事故に遭ったりしたら、私が診る。絶対。」

これがあなたに言った最初の宣言。
今でも覚えてくれてたら、嬉しい。
しーちゃんに言えなかった宣言だから。
あなただけでもちゃんと覚えてて。

でも、夢は遠くって。

私は珍しく落ち込んでて、外は涼しくて。
あなたと会ってもうすぐ1年になる。

「ダメかもしれない。」

私はつぶやいた。
あなたの隣で。

「あんた達のための医者。無理かも。」

言い方こそそっけなかったが、目からは涙が流れ出ている。

「どうしてさ。」

あなたはまっすぐな目で見つめてきた。
真剣な話の時は、いつでも逃げないでこっちを見てくれたね。
その、エメラルドグリーンの瞳に吸い込まれそうになる。

あなたは、私が応えるまでゆっくり待ってくれた。

「バカだもん。今日も先生に言われた。『お前じゃ無理。』って。」

鼻をすする。

「あきらめるのかよ。」

「ごめん。」

苛々しているのが伝わってくる。

「ごめんね。」

私はたまらなくなって逃げ出した。

走って走って。

家まで帰ろうとした。

あなたは追ってきた。

でも、現役高校生の方が早い。

いくら、日本人より優れた脚力を持っていても、私だって足の速いほう。

あなたの指が、爪が・・・私を捉えそうになる。

髪の毛に触る。

でも、私は振り切った。

そして・・・しばらくあなたと会わなかった。

顔をあわせずらかった。

あんなこと言ったから当然だよね。

春がやってきた。
家の周りには桜の木がある。
桜が綺麗に舞っている。

そんな中、私は高校最後の生活を送ることになった。

姿が見えた。
チラッと。
見違いかもしれない。
でも、私は追いかけずにはいられなかった。

「ねぇ！」

声をかけた。

やっぱりあなただ。

あなたはすこし照れた笑顔で迎えてくれた。

「俺の子だ。」

そこにいたのは可愛らしい赤ちゃん。

「え？！」

聞いてない。初耳。
結婚したんだ。

ショックかな？
好きだったから？
でも・・・

「おめでとう。」

ちゃんと伝えた。

「ありがとな。こっちのヤツなんか俺にそっくりだろ？」

双子だった。もしかして、相手は・・・

「で、こっちは、ゆき似。」

ゆきちゃんだ。双子の妹、しーちゃんの妹。

「ほんとだ。」

ふふっ・・・。
っとあたたかい笑顔になる。

「しーちゃんにも似てる。」

懐かしい日々が思い出される。

「当然だろ。双子なんだし。」

あなたの笑顔は、今までになく輝いていた。
私はその子にそっと触れた。
やわらかい。

かわいい。

「知ってる？双子って遺伝らしいよ。双子のきょうだいって双子を産みやすいらしいよ。」

ついこの前学校で習ったうんちくを披露してみる。

「へー。物知りだな。俺はもっと産まれてほしかったけど。」

あなたは子供を見る。
目つきが優しい。
石垣に二人で座りなおした。

こつん・・・

あなたが、ぴとっ・・・と私にくっつく。

「俺・・・・良い父親になれるかな？」

心配そうに空を見上げた。

「当たり前じゃん！あんたの子供でしょ。それに、ゆきちゃんだって。」

私がムキになって応えるとあなたは、私のひざに乗ってきた。

「ちょっと！重たいし！」

でも、私はあなたを無理にどけようとせず、そのままでいた。
この近さでいられるのが嬉しかった。

「浮気者！って怒られるよ？」

私が冗談半分に言うと、

「ばぁーか。お前みたいなガキには興味ないよ。」

っていわれた。

わかってたけど、ショック・・・かな？

「子供には強くなって貰わなきゃだな。自分でメシくらい用意できるようにして貰わないと・・・」

そしてあなたは笑った。

私も笑った。

ずっと、しばらく笑って、涙が出るほど笑って、落ち着いた頃に私は言った。

「・・・・。やっぱりね、私、諦めないから。ちゃんと・・・ちゃんと・・・夢を追ってやる！無理でも、負けるもんか！！！」

空に向かって拳を突き上げた。

「うん。頑張れ！待ってるから。御得意さんになってやるよ。」

あなたは私を見つめた。

「ダメじゃん。私、医者だよ？いつも来られたら・・・さすがに困る。」

でも、嬉しくって、私はあなたに抱きついた。

「期待してて。すぐになってやるから。」

しっかりと前を見据える。

私の漆黒の瞳と、あなたのエメラルドグリーンの瞳には、同じものが映る。

私は立ち上がって、背伸びをした。

「さてと、勉強でもしますか！なんせ、獣医師だもん。道のりは長いよ！」

私があなたに向かって最高の笑顔で言った。

「にゃーぁ」

あなたも応えてくれた。

「うん！」

私は走り出す。

いつか、あなたの声が届く日まで。

（後書き）

この話はフィクションだったり、ノーフィクションだったり。・・・。

エメラルドグリーンのアイツにはお世話になりました。

ゆきちゃんとお幸せに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4189i/

エメラルドグリーンの瞳のアイツ

2011年1月13日01時02分発行